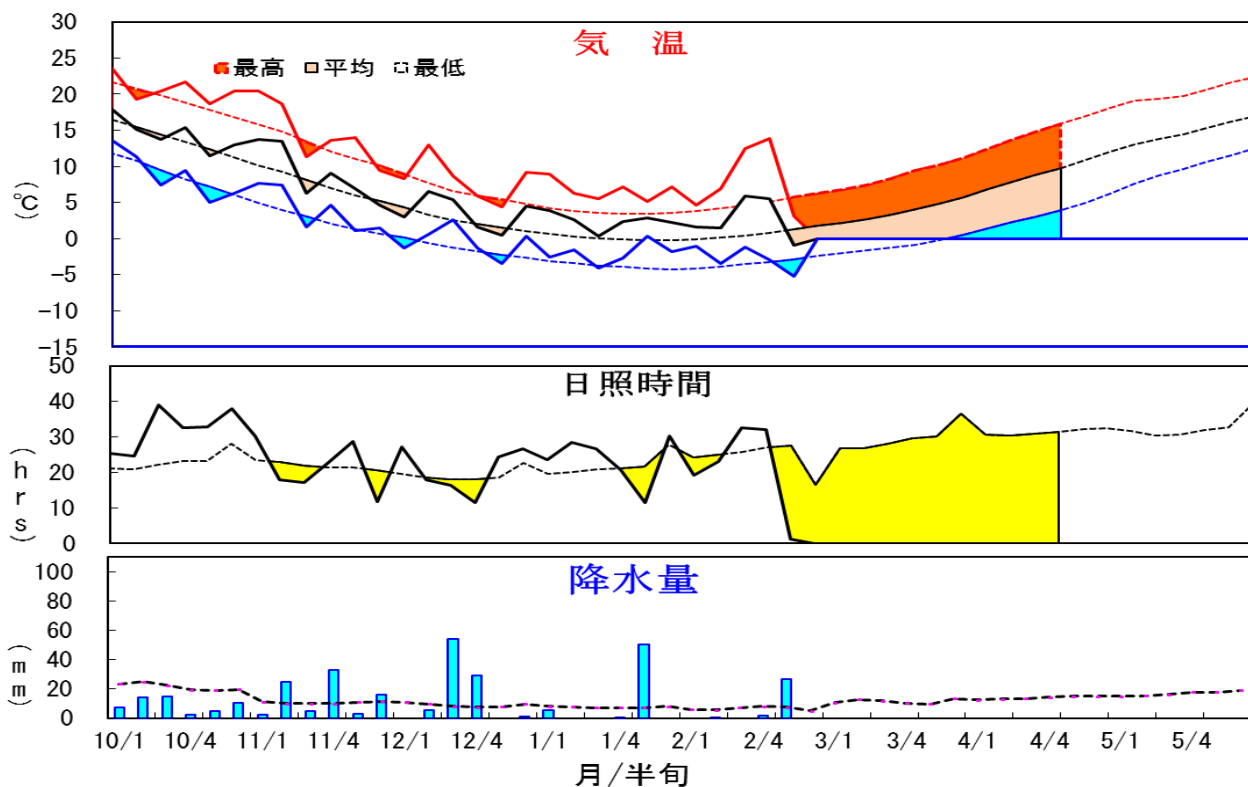


麦作情報第3号

令和6年 2月27日：JA全農みやぎ

～10月中旬に播種された大麦は 幼穂形成始期に達している～

1 これまでの気象経過



2 東北地方の1か月予報【2月24日～3月23日までの天候見通し 気象庁HPより】

- ・東北太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い。
- ・気温は、平年並みの確率40%、高い若しくは低い確率30%。
- ・降水量は、多い確率40%、平年並み若しくは少ない確率30%。
- ・日照時間は、少ない確率40%、多い若しくは平年並みの確率30%。

気温、降水量、日照時間、降雪量の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 02/24～03/23	30 (低) 40 (平) 30 (高)
		1週目 02/24～03/01	40 (低) 40 (平) 20 (高)
		2週目 03/02～03/08	30 (低) 50 (平) 20 (高)
		3～4週目 03/09～03/22	20 (低) 40 (平) 40 (高)
降水量	東北日本海側	向こう1か月 02/24～03/23	30 (低) 40 (平) 30 (高)
	東北太平洋側	向こう1か月 02/24～03/23	30 (低) 30 (平) 40 (高)
日照時間	東北日本海側	向こう1か月 02/24～03/23	30 (低) 40 (平) 30 (高)
	東北太平洋側	向こう1か月 02/24～03/23	40 (低) 30 (平) 30 (高)
降雪量	東北日本海側	向こう1か月 02/24～03/23	40 (低) 30 (平) 30 (高)

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

3 生育状況

(1) 古川農業試験場内作況試験ほ場（2月13日現在）

- ・中旬（10/19）播種区，下旬（10/31）播種区とも，草丈は平年並み～平年より長く，茎数は概ね平年並み～上回っており，**越冬前の目標生育量を確保している。**
- ・葉数は平年より多い。
- ・**大麦の幼穂長は平年より長く，シュンライは1月5日に，ミノリムギは1月16日に，それぞれ幼穂形成始期に達した。**
- ・**小麦の幼穂長は概ね平年並みであった。幼穂形成始期には，まだ達していない。**

	品種・区分	草丈		茎数		葉数		幼穂長	
		本年 (cm)	平年比 (%)	本年 (本/m ²)	平年比 (%)	本年 (枚)	平年差 (枚)	本年 (mm)	平年差
大麦	シュンライ 中旬	11.4	107	858	94	7.0	1.2	2.8	1.4
	同 下旬	8.2	113	799	136	5.5	1.2	1.1	0.7
	ミノリムギ中旬	13.1	120	956	91	7.2	1.1	2.3	1.2
	同 下旬	8.9	114	885	150	6.1	1.5	1.0	0.6
小麦	シラネコムギ中旬	13.8	119	977	103	7.1	0.8	0.5	0.4
	同 下旬	10.2	103	1008	178	6.6	2.0	0.4	0.2
	夏黄金 中旬	10.8	111	937	110	7.0	0.9	0.4	0.3
	同 下旬	8.2	96	682	170	5.6	1.3	0.3	0.2

注1) 中旬播種区の平年値は、過去7か年中の最高値と最低値を除いた5か年分の平均値。

注2) 下旬播種区は平成29年播種から供試のため、平年値は過去5か年の平均値。

注3) 越冬前目標生育量：葉数4～5枚、分けつ1～2本、茎数400～500本/m²。



【作況 シュンライ 10月19日播種】



【作況 ミノリムギ 10月19日播種】



【作況 シラネコムギ 10月19日播種】



【作況 夏黄金 10月19日播種】

(2) 麦類生育調査ほ（2月10日現在）

- ・大麦・小麦ともに、草丈は平年より長く、茎数は平年を上回っている。
- ・**幼穂長は、大麦では0.2～3.3mmで、10月に播種されたものは、幼穂形成始期に達している。**
- ・小麦の幼穂長は0.0～0.8mmで、幼穂形成始期には、まだ達していない。
- ・暖冬と雪不足の影響で、一部のほ場では野鳥による食害が発生している。

	品種・区分	地域	播種期 (月日)	草丈		茎数		幼穂長 (mm)
				本年 (cm)	平年比 (%)	本年 (本/m ²)	平年比 (%)	
大麦	シュンライ	大河原	11/16	8.2	110	382	140	0.2
		仙台	10/16	11.8	-	828	-	1.8
		桃生	10/2	19.4	178	791	131	3.3
	ミノリムギ	桃生	10/14	12.2	110	856	181	1.3
	ホワイトファイバー	大河原	11/11	8.6	-	357	-	0.2
小麦	あおぼの恋	豊里	11/1	10.3	111	454	203	0.4
	シラネコムギ	古川	10/20	14.7	144	1,529	289	0.4
		鹿島台	10/26	14.7	170	993	163	0.2
		桃生	10/25	9.0	-	946	-	0.8
		夏黄金	涌谷	10/23	11.1	-	634	-

注1) 平年値は、過去7か年中の値から、最高値と最低値を除いた5か年の平均値。

注2) 大河原「ホワイトファイバー」は、令和元年播種から調査のため、平年値(比・差)はない。

注3) 仙台「シュンライ」は、令和4年度播種から調査のため、平年値(比・差)はない。

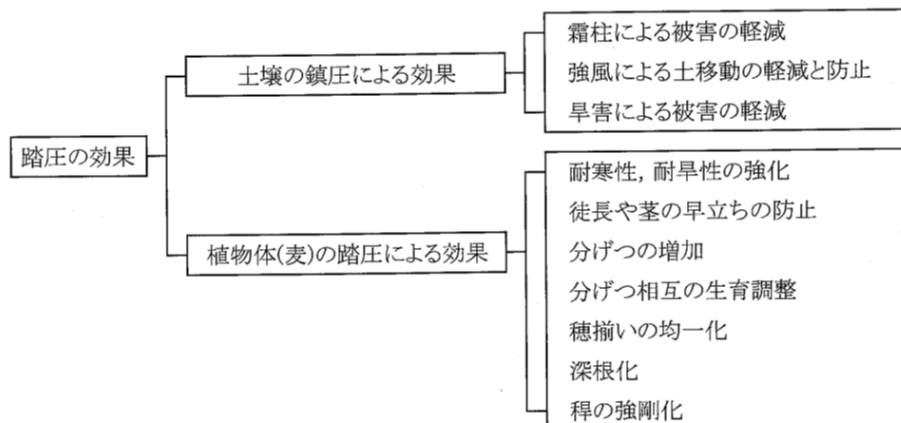
注4) 桃生「シラネコムギ」は、令和5年播種から調査地変更のため、平年値(比・差)はない。

4 今後の技術対策

(1) 排水対策

- ◆分げつ期の湿害は、生育抑制や分げつの減少につながる。
- ・ほ場が排水不良になると、霜柱によって根が浮き上がり、麦が枯死することもある。
- ・播種が遅かったり、鳥害の影響を受けて生育が遅れているほ場では茎数不足となり、被害が大きくなるので早急に改善する。

(2) 麦踏み



- ◆効果：霜柱による根の浮き上り防止，風による土移動の軽減・防止，麦の耐寒性の強化，分けつ増加，徒長防止，など，上記に示すような効果が期待できる。
- ・実施時期及び回数を目安は，離乳期（3～4葉期）から茎立ち（主稈長2 cm，幼穂長2 mm程度）までである。越冬後の実施回数は，1～2回を目安とする。
- ・留意点：土壌表面が十分に乾燥し，ローラーに土壌が付着しない条件で行う。重粘土壌や土壌が過湿状態の場合は土壌が固結し，根の発育障害が大きくなるため行わない。

(3) 追肥

- ・融雪後は，越冬後の生育量を確保する追肥が重要になる。
- ・幼穂形成期の追肥は有効茎歩合を向上させ，穂数を確保する。幼穂長が2～3 mmの時が目安で，この頃から茎立ちし，幼穂や節間の伸長が急激に進む。

◆10月中に播種された大麦は幼穂形成始期に入っているため，ほ場の乾燥具合を見ながら，早めに追肥作業を計画する。

- ・幼穂形成期頃の窒素栄養状態の悪化は有効茎歩合の低下を招くが，窒素を過剰に施用すると節間伸長により倒伏の原因となるので，適期・適量施用に努める。
- ・追肥時期が遅れると，効果が十分に得られないので，幼穂長を確認し適期に実施する。

追肥の種類 (生育ステージ)		株直し追肥 (融雪後)	幼穂形成期 (幼穂長2～3 mm)	減数分裂期 (幼穂長30 mm)	穂揃期 (8～9割が出穂)
目的		茎数の増加 葉色の回復	有効茎歩合増加 (穂数の確保)	一穂粒数の増加 登熟良化	小麦の子実タンパク質 含有率の向上
大麦	時期	2月	2月下旬～3月中旬	4月下旬	硬質麦防止のため 実施しない
	施用量		3月上旬～4月上旬	4月下旬～5月上旬	
小麦	時期	2月	3月下旬～4月中旬	4月下旬～5月上旬	5月中旬
	施用量		窒素成分1～2 kg (硫安5～10 kg)	窒素成分2～2.5 kg (硫安10～12 kg)	窒素成分2～2.5 kg (硫安10～12 kg)

※「夏黄金」は2倍